京都御苑ニュース

夏

白銀の　襷掛けする　幼子は
南の文を　抱きかかえおり
（ナガサキアゲハの幼虫にであう）

御苑・蝶々「自然学」
―蝶の飛ぶ風景を観る―

塚本　珪一

ナガサキアゲハ♀産卵中

私にとって御苑での二〇〇九年はすばらしい日々であった。というのは御苑の各所で南の蝶であるナガサキアゲハにであった。私は御苑の前で生まれ小学生時代から中学後期まで御苑で昆虫少年をやっていた。その頃はナガサキアゲハなど知らなかったし、みることもなかった。いま、人たちはこの蝶をみて「温暖化」というだろうが、私はこの現象を「複合的汚染」と呼びたい。半世紀の昔、御苑の自然も見かけは今日同様にあまり変わらないが、いつの間にか騒音と見えない排気ガスは気がつけば私たちを包み込んでいた。

二〇〇九年十月、西の乾御門のカラタチに一頭のナガサキアゲハが産卵行動のために慌ただしく飛ぶのをみた。私にとっては実に不思議な風景であった。最初、この蝶に御苑で出会ったのは一九九四年五月八日で、吉田徹也さんと北西部の近衛邸跡付近で確認した。後翅に白斑のある雌であった。その頃、京都市街地や京都北部でもかなり生息が確認されていた。ある時など御苑での春の自然教室の日に子どもの持つ虫籠に一頭の雄が入っていたのには驚いた。

しかし、この蝶がクサギの花やカラタチの周辺に飛ぶのを観るのは二〇〇九年が初めてであったし、幼虫や蛹を食樹で見かけるのはいつもの京都御苑ではなく異様な風景であった。そして、何となく不似合いであり変であった。産卵を終えた蝶が飛び去って、もとの御苑の風景に還っていた。

蝶たちは「風景」を創っている。そのワンセットの構造は「チョウ・食草・食樹・吸蜜の花・歌垣＝恋の場」で、自然が複雑で羅網の世界であることを教えてくれる。このモデルはすべての生きものたちの創る風景に当てはまる。

御苑では二〇〇九年に新しい蝶の仲間を迎えた。トンボ池の小径で河畔林の住人であるコムラサキの死体を見つけた。また、池の上に枝を伸ばしたクサギには小さなオレンジ色のアカシジミを見つけた。遙か昔、私はこの蝶を見ていたので再発見である。コムラサキはオオムラサキと同様に紫色の光を放つが、野鳥からの襲撃を目くらまかしで避けるのだと思う。ナガサキアゲハは雄の深い青、雌は楽しくなる白斑を見せてくれる。トンボ池でのハスの葉も蝶たちの休憩所でムラサキシジミもナガサキアゲハもしばし休憩している。

クロコノマチョウ

物好きや　匂わぬ草に　とまる蝶
芭蕉

ナガサキアゲハ幼虫

蝶の斑紋を見て、私たちは単純に「美しいのは雄」などと決めつけるが、そうではなく、蝶たちにとって眼状紋も野鳥への威嚇であり、紫外線レベルでの光は歌垣の場での情報交換の手段である。

このように蝶たちは四季それぞれに私たちにもさまざまな風景を創って見せてくれる。ナガサキアゲハは「クサギ・カラタチ・ミカン類・聖域」という構造での南の風景を再現してくれる。

昔から御苑に多いクスノキの周辺にはアオスジアゲハが飛んでいるが、子どもの頃、この蝶を「雷蝶」と教えてもらった。夏の午後の夕立の日を思い出す。

二〇〇九年の秋にはクロコノマチョウも何度か姿を見せてくれた。松山均さん（二〇〇五）は御苑でのウスイロコノマチョウも記録されているが、私はまだ見ていない。二〇〇八年には南からのイシガケチョウも記録されたが、その後、見ていない。関東に北上するアカボシゴマダラも見たという情報もあるが確かめられない。

様々な問題をかかえつつも、御苑で賑やかに蝶たちが飛ぶ風景こそが、私たちとの共生に必要な生物多様性という二一世紀の自然の学問「自然学」であると信じている。

（京都自然観察学習会）

トンボ池の生き物
谷　幸樹

京都御苑には多くの池がありますが、トンボの名のついたトンボ池があります。トンボ池が造られた一九九四年～一九九五年頃には、ガマを中心とした水草だけで、広い水面が見られました。一九九六年頃よりハスが一面に繁茂するハス池になったために広い水面を好むトンボが減少していますが、まだまだ多くのトンボが観察できます。

京都御苑で三十九種のトンボが見られるなかで、トンボ池では、ホソミイトトンボ・キイトトンボ・ベニイトトンボ・アオモンイトトンボ・クロイトトンボ・セスジイトトンボ・モノサシトンボ・ホソミオツネントンボ・ハグロトンボ・ギンヤンマ・クロスジギンヤンマ・シオカラトンボ・オオシオカラトンボ・ショウジョウトンボ・ヨツボシトンボ・アキアカネ・タイリクアカネ・ナツアカネ・マユタテアカネ・マイコアカネ・ノシメトンボ・コノシメトンボ・リスアカネ・ナニワトンボ・コシアキトンボ・チョウトンボ・ウスバキトンボの二十七種のトンボを観察しています。

モリアオガエル

特に注目する種としては、「京都府レッドデータブック上巻、野生生物編」の準絶滅危惧種に入っているベニイトトンボとナニワトンボが、見られますのでトンボ池と共に保全していきたいと願っています。

また、日本では昔から親しみのあるギンヤンマも見られます。成熟♂は水辺を旋廻してナワバリ飛翔をします。産卵は主に連結態で水面付近の植物組織に行いますが、♀が単独でも行います。

四季を通じて見られるトンボの種は変わりますので、観察してみましょう。

五月～六月にかけて、モリアオガエルが観察できます。産卵は夜、水面に張り出した木の枝の上に♀が、総排出口から出した粘液で白い泡を作り、その中に百五十から二百個の卵を産み乾燥から守ります。約一週間後、泡の中で卵からふ化した幼生は下の池に落ち込んで泳ぎ出します。幼生は一ヶ月で子ガエルになります。

モリアオガエルは周辺に樹木が多くある良い環境にしか生息できないので、京都御苑の自然をこれからも保全していきたいと思っています。

（京都自然観察学習会）

ギンヤンマの連結状態での産卵

自然はわれらを　われらは自然を

絶えまない人と自然の連携を象徴するメビウスの連環。これが息の長い活動が期待される自然保護のシンボルマークに表現されています。

発行人
〒602-0881　京都市上京区京都御苑３番地
☎075-211-6364
財団法人　国民公園協会
京都御苑　木村博司

編集
白川書院

監修
環境省京都御苑管理事務所

本紙は再生紙を使用しています。

催　事　案　内

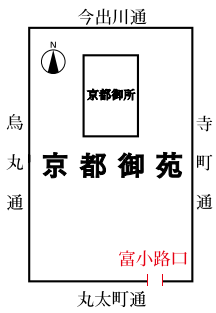
■平成22年京都御苑自然教室

一般の方を対象とした自然教室の今後の予定は、下記のとおりです。都市の中で貴重な緑をもつ御苑で、夏の自然を観察しましょう。

夏の自然教室 “夏の御苑にふれよう”

7月25日（日）9：30〜12：00

主　　催　環境省京都御苑管理事務所　TEL 075(211)6348
　　㈶国民公園協会　京都御苑　TEL 075(211)6364
講　　師　京都自然観察学習会の先生方に指導して頂きます。
内　　容　夏の御苑にはどんな草花やキノコがあり、どんな虫や鳥たちが生活しているか観察します。
集合場所　京都御苑　富小路休憩所前
　　(京都御苑富小路口入って右側)
受付時間　当日　9:00〜9:20
参 加 費　無料
そ の 他　筆記用具をご持参下さい。手持ちのルーペ、双眼鏡、図鑑などの観察用具があると便利です。



＊以降の自然教室予定

秋の自然教室 “秋の御苑にふれよう”

平成22年11月21日（日）9：30〜12：00

御苑の花暦

和　　名	開　花　期	主に見られる場所
キショウブ	5月〜 6月	出水の小川
アベリア	5月〜11月	大宮・仙洞御所 東側散策道沿い
サルスベリ	7月〜 9月	間ノ町口内、九条池周辺 建礼門前、寺町御門、等

トンボ池一般公開

8月上旬に一般公開を予定しています。
ハスの開花状況により公開日を決定しますので
直前のホームページ等でご確認願います。

会　員　募　集

1. 会員の種類　（会費の会計年度は1月から12月まで）
　①賛助会員（法人）　年会費 10,000円以上
　②普通会員（個人）　年会費 1,000円以上
2. 会員への特典
　①葵祭、時代祭の招待券を進呈します。
　（ただし、普通会員は会費4,000円以上の方に限ります。）
　②本会発行物をそのつど送付します。
3. 申し込み、問い合わせ先
　㈶国民公園協会　京都御苑
　住所　京都市上京区京都御苑3
　〒602-0881　TEL 075(211)6364

①「明治六年西京大博覽会図絵」

公家町から京都御苑へ（下）

伊東　宗裕

前回は江戸時代の京都御苑の地（公家町）について書きました。その公家町の住人は天皇が東京へ行ってしまうと、一緒に京都を離れてしまいます。公家町はたちまち空き家だらけになってしまいます。京都市内一等地の空き家をどうするという課題がもちだされたわけです。

いずれにせよこのままにはしておけない。文化財の保護や歴史的景観の保全なんていう考えがなかったころですから、とりあえず考えられたのがイベント会場です。博覧会の会場にするということです。

明治五年に開催された第一回京都博覧会は西本願寺・建仁寺・知恩院を会場としました。明治初期の博覧会は、書画骨董・京都の産業製品が並ぶ、博物館と見本市を併せたようなものです。京都の景気をとにかく回復したいという目的で開催されました。

翌年の第二回は京都御所（主会場）と仙洞御所（禽獣会場）を会場に開かれました。禽獣会場では鶴、らくだ、ろばなどの動物を展示した一種の動物園です。両御所だけでなく、公家邸宅でもさまざまな催しがあったので、京都御苑全域を会場としたと言ってよいでしょう。

図①「明治六年西京大博覧会図絵」はこの時の会場図です。図の右下隅、九条家跡では相撲をやっています。今出川家跡では力持ちの見せ物、近衛家では名物糸桜の観賞と、さまざまなイベントが行われています。

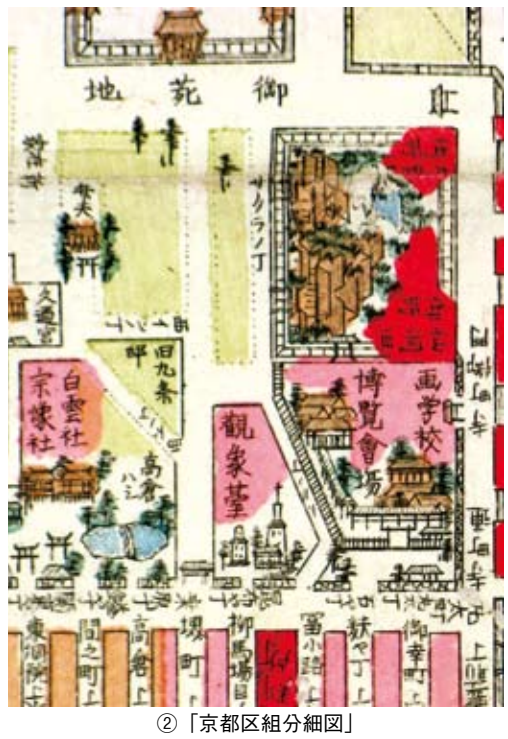
第二回博覧会は三月十三日から六月十日まで開かれ、主会場である京都御所は四十万六千人あまりの入場者でにぎわったそうです。一日平均六千人強。いいたとえではないかもしれませんが、今年一月から三月に京都国立博物館で開催された「ハプスブルグ展」が一日平均入場者四千人強ですから、現代の人気展覧会と比べても遜色ないにぎわいを見せました。

このあと明治十三年まで京都御所を中心にした博覧会が毎年開かれましたが、一方で明治十年から京都御所を含む旧公家町を保存する「大内保存事業」が始まりました。この事業の結果、京都御苑がうまれたことはよく知られています。

保存事業がはじまると京都御所や仙洞御所が会場に使えなくなりました。そこで御苑の一画に常設・専門の博覧会場が作られ、明治十四年の第十回京都博覧会から使われました。図②は「京都区組分細図」に描かれた京都御苑内常設博覧会場とその周辺です。仙洞御所の南どなりに作られました。現富小路グラウンドの地です。東西に隣接するのが明治十二年に仮校舎で発足した京都府画学校（京都市立芸術大学の前身）と明治十三年に開設された観象台（京都地方気象台の前身）です。

どうも明治十年代には京都御苑を文化施設が集まる地域にしようという考えが、どこかにあったように思えてなりません。しかしその役割は岡崎に移り、明治中ごろには現在のような京都御苑の姿を整えてきました。最終的にほぼ現在の姿になるのが大正四年に京都で行われた大正天皇即位大典の時です。文化ゾーン化がしりぞいたのは、儀式の場としての京都御所と京都御苑が前面に出てきたためなのかもしれません。

（京都歴史資料館　担当課長）



②「京都区組分細図」

生物多様性（2）

生物多様性保全の意義、日本の状況

山本　昌世

「生物多様性」という言葉についてあまり身近に感じない方が多いかと思いますが、この言葉は、私たちが地球で生きていくための重要なキーワードなのです。

生物多様性とは、生き物がもつ「個性」と「つながり」のことと言ってもよいでしょう。生態系を形成する自然には森林や河川などいろいろなタイプがあり、そこで生息する生物も動物や植物、微生物といった多様な種が存在します。さらに、同じ種でも異なる遺伝子を持つことにより形や模様などが違う個体がいます。

このように、多様な関係でつながっている地球上の生物は、空気や水、木材などの多くの恵みを与えてくれます。私たちはこの恵みに支えられ生活しているため、生物多様性を保全することはとても大切なことなのです。

日本は、四季の変化に富む島国であることから多種多様な生物が生息しており、この恵まれた環境の中で、人はうまく自然と共生して暮らしてきました。

しかし、今、日本では、①開発や乱獲による種の減少・絶滅、生息・生育地の減少、②里地里山などの手入れ不足による自然の質の低下、③外来種などの持ち込みによる生態系のかく乱が問題となっています。さらに、地球温暖化による生態系への影響も危惧されています。

これらの危機から生物多様性を保全するため、全国で色々な取り組みが行われています。「生物多様性条約第十回締約国会議（COP10）」が名古屋で開催される今年は、「国際生物多様性年」であり、関連イベント等が全国各地で開催されていますので、みなさんも是非参加してください。

（京都御苑管理事務所　庭園科）

大量のセミの抜け殻